

知の技創造

ものづくり大学発

▷69◁

大学院での研究を開始した当初は、「言語学（特に英語を対象としたもの）」分野で研究を行っていましたが、その後「日本語と英語の違い（言語に現れる文化的、社会的、認知的相違）」という観点から研究にシフトし、さらに、研究した内容を英語教育に活かすことができることを目標に「英語教育」「応用言語学」の分野の研究をするようになった。

日本語と英語の間に、発想の仕方や物事に対する認知

に違いがあり、それが言語表現や言葉の使用に相違をもたらすことが多く見られます。英語教育において「英語そのものを学ぶだけでは、どのような文化的相違が根本にあり、言語に現れているか・相違があるのか」ということを授業で学生たちにかすことができないかと思ひます。

これまでも英語教育に生かすことが当たり前になって、音、正しい文法知識のみの取得が当たり前になって、研究の意義を見いだし、教

土井 香乙里 総合機械学科 講師

異文化理解と多様な英語

ンカとしての英語」というような異文化からの人々が企業に参入する機会が増え、実際にグローバルなレベルでの企業間のやりとりの中では、英語を母語としていない人たちがさまざまな英語の英語でコミュニケーションを取り引き相手と「それを使い、」母語に影響された英語でコミュニケーションをそのために、「正しい発



どい・かおり 富山大学大学院・大阪大学大学院・早稲田大学大学院などで学び、早稲田大学人間科学学術院（人間情報科学科）助手などを経て、現職。専門は、言語学・応用言語学。

えたいと思います。さらに、さまざまな文化出身の人たちと、仕事の上で、また日常生活レベルで「コミュニケーション」を取る上で、「二」とは「の部分のみではなく、自分とは異なるものの見方を、また違った文化背景を持つ人たちのことを理解する、つまり「異文化理解」が、とても重要です。学生たちには、この背景にあることを、今後の、学生たちが苦手を、お互いを理解できるよう英語を楽しく、また興味を持って学習することが可能な授ニケーションを取る姿勢を身業や教材開発を継続していきに付けてほしいと考えています。

研究では、e-learning 教材の開発もなっています。コロナ禍以来、「遠隔」形式で授業を行ってきましたが、対面授業でできることや、対面授業でできないことや、効果的に伝えるのか、また対面授業にはない遠隔ならではの、つまり「異文化理解」が、とても重要です。学生たちには、この背景にあることを、今後の、学生たちが苦手を、お互いを理解できるよう英語を楽しく、また興味を持って学習することが可能な授ニケーションを取る姿勢を身業や教材開発を継続していきに付けてほしいと考えています。